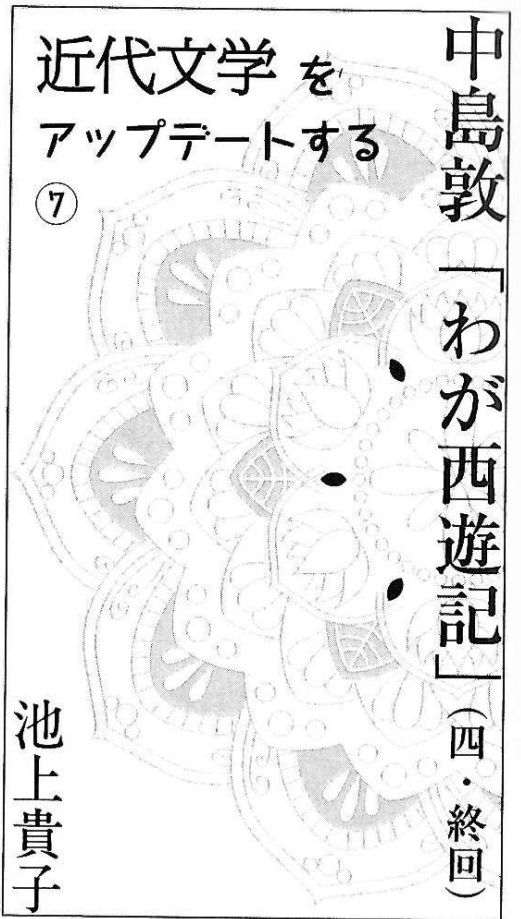


中島敦「わが西遊記」(四・終回)

近代文学をアップデートする

⑦

池上貴子



「悟浄歎異」2 四、宇宙の絶望と慈愛——三蔵法師を観察する

悟浄の手記において、最も紙幅が割かれたのは、行動の天才と称賛する孫悟空についての「推し語り」だったが、師である三蔵法師に関しては、悟空とは違った哲学的な熱量の語りを展開しているのは興味深い。悟空の破天荒で問答無用の行動に振り回されながら考察した時とは違い、三蔵の場合、まずその内面にアプローチし、精神世界に踏み込んでいく手法がとられている。なぜなら、悟浄の悟空に対する興味がその圧倒的な強さ、生き物として強者であることから始まるように、三蔵法師への興味は徹底的な弱さ、生き物としての弱者であることから始まっているからだ。

三蔵法師は不思議な方である。實に弱い。驚く程弱い。變化の術も固より知らぬ。途で妖怪に襲はれれば、直ぐに擱まつて了ふ。弱ひといふよりも、まるで自己防衛の本能が無いのだ。

注目したいのは、三蔵の弱さの原因を「自己防衛の本能が無い」ことにあると分析している点だ。弱さでいえば、悟浄自身もまた、元妖怪でありながら、悟空や八戒のような強さを持たない。「わが西遊記」シリーズにおいて「流沙河」は妖怪の共同体を象徴しているが、悟浄は他者との違いや疎外感、劣等感から「距離を保つて」きた心の弱さの持主だった。続編「悟浄出世」に至っては、「渠ばかり心弱きは無かつた」と語り手に評された最弱キャラクターとして設定される存在だ。これに対し、三蔵法師の「自己防衛の本能が無い」ことに由来する「弱さ」は、自分を脅かす他者が内的に存在しないことを意味するものだ。悟浄は、自分とは次元の違う「弱さ」の概念を、三蔵と出会うことによって知ったのである。

外面的な困難にぶつかった時、師父は、それを切抜ける途を外に求めずして、内に求める。つまり自分の心をそれに耐へ得るやうに構へるのである。いや、其の時慌て

て構へずとも、外的な事故に依つて内なるものが動揺を受けないやうに、平生から構へが出来て了つてゐる。何時何處で窮死しても尚幸福であり得る心を、師は既に作り上げてをられる。だから、外に途を求める必要が無いのだ。

悟浄は三蔵の弱さの根源に、他者（外）を必要としない強さ、すなわち自己完結した精神世界を発見する。つまり三蔵の弱さは絶対性という「強さ」と鏡合わせなのである。奴田原論は、「強さに対して相対化の軸として存する對他的なものを持たないが故に、その強さは一種の絶対性を獲得している」、「三蔵は頂点どころか、それを測る為の物差しすらも持つてはいないのである」と論じており、示唆的である。さらにいえば三蔵法師のこの精神世界を、仏教的な要素と直接結びつけない点がこの作品の奥深さだ。悟浄はその枠組みを最初から除外して考察している。

また、この絶対性を含む「強さ」の境地は、「流沙河」（妖怪共同体）の中では実現し得ないと悟浄が理解している点も興味深い。三蔵にとつて、「外」における「死」すら「内」にある「幸福」を妨げることがない。悟空のように、世界が与える困難を打開し、自ら新しい世界を創りあげていくのとは違い、三蔵の場合は死すら特別な意味を持たず、

「何も打開する必要が無い」世界・領域に心を置いている。悟浄が「どんな妖怪に喰はれようと、師の生命は死にはせぬのだ」という盲目的な確信を師に抱く理由は、三蔵が肉体の死と心の死を完全に切り分けた生を送っていると理解しているからだ。

だからこそ、悟浄は三蔵法師が虚無的な世捨て人としての生を選択しないことを高く評価する。「病身と、禦ぐことを知らない弱さと、迫害を受けてゐる日々」にあつても悟空や八戒同様に、「怡しげに生を肯う」という立場に在り続けることを「勇敢」だと驚嘆するのである。

なお、この「勇敢」という三蔵への賛辞は、この弱き師に妖怪の弟子三人ともが惹かれる理由を考察する場面でも使われている。師の強大な精神世界の根本を探り、「悲劇的なもの」という「妖怪からの成上り者には絶対に無い」、特殊な世界観があると分析した時のことだ。

私は思ふに、我々は師父のあの弱さの中に見られる或る悲劇的なものに惹かれるのではないか。（中略）三蔵法師は、大きなものの中に於ける自分の（或ひは人間の、或ひは生物の）位置を——その哀れさと貴さをハッキリ悟つてをられる。しかも、その悲劇性に堪へて尚、正しく美しいものを勇敢に求めて行かれる。確かに之だ、我々